

時態助詞“着”の意味と時相構造

横山 昌子

はじめに

言語が対象とする現実世界の状態や動作行為（これらをまとめて事態（event）と呼ぶ）は時間と関係している。われわれは事態を言語化するとき、その事態がすでに発生しているのか、発生する前なのか、進行中であるのか、完了しているのかなど異なる段階を捉えて表現する。時態（アスペクト；aspect）は、このような事態の展開中におけるそれぞれの段階を示すものである。時態が言語中でどのように体系化されているかは、言語によって異なる。現代中国語では、時制が語彙的な形式で表されるのに対し、時態は文法的形式を持ち範疇化されている。時態を表す形式としては、時態助詞“了”、“着”、“过”や時態副詞“在”、“正”“正在”などあり、その他に“起来”、“下去”、語気助詞“了”、動詞重ね型などを含める考えもある。しかし、中国語の時態範疇の成員は助詞や副詞など統語上の機能が異なっており、また複数の時態成分が同時に用いられることもあり、そのためそれぞれが表す時態義が明確ではない。たとえば、時態助詞“着”が表す時態義については、動作や状態の持続を表すとする説（戴耀晶（1991）など）、動作が進行中であることを表すとする説（Chao（1968）など）、動作の進行と状態の持続を表すとする説（木村（1983）など）、動作行為の持続と動作後の姿態や静態の持続及び動作の進行を表すとする説（龚千炎（1995））など研究者によってさまざまな見方がある。筆者は、“着”は「動作の持続」と「動作の結果の持続」を表すと考える。本論では、“着”が二

つの異なるタイプの持続を表すことについて、動詞自身に内在する時間特徴である時相 (phase) が“着”の持続のタイプを決定しているという考えを提示する。分析の方法としては、“着”が生起する文の論理構造を記述し、この違いが時相構造の違いによるものであること明示する。

1 二つの持続の局面という問題

1.1 動作の持続と動作の結果の持続

呂叔湘 (2008:666) は、現代中国語の“着”について次の四つの用法を挙げている。例文をいくつか引用する。

①動作が現在進行中であることを表す。

- (1) 雪正下着呢 (雪がちょうど今降っている)
- (2) 他们正看着节目呢 (彼はちょうど今テレビを見ているところだ)

②状態の持続を表す。

- (3) 门开着呢 (ドアが開いたままだ)
- (4) 他穿着一身新衣服 (彼は全身新品の服を身に付けている)

③存在文中に用いて、ある姿態で存在することを表す。

- (5) 路旁长椅子上坐着一对老年夫妇
(道端の長椅子に一組の老夫婦が座っている)
- (6) 墙上挂着一幅水墨画 (壁に一枚の水墨画が掛かっている)

④ V_1 +着+ V_2 のように連動文を構成し、 V_1 と V_2 は次のように多様な関係を表す。

a. 二つの動作が同時に進行することを表し、 V_1 は V_2 の方式を表す。

- (7) 说着看了我一眼 (話しながら私を一目見た)

b. V_1 と V_2 が、手段と目的の関係を表す。

- (8) 领着孩子朝外走 (子供を連れて外に出た)

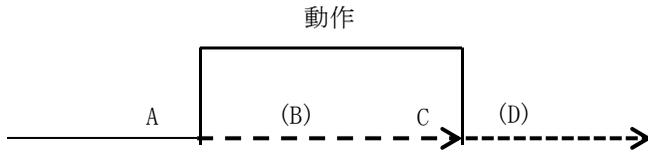
c. V_1 が進行中に V_2 の動作が出現することを表す。

- (9) 想着想着笑了起来 (考えているうちに笑い出した)

これらの異なる用法によって表されている時態の意味は、動作が持続しているのか動作後のある状態が持続しているのかという観点から分類する

と、①と④が動作の持続で、②と③が動作後の状態の持続に属する。しかし、時態が事態の発展段階の異なる局面を捉えたものとするならば、二つの持続は動作が進展する時間軸上の異なる段階にある。これを図示すると下記の図のようになる。図中の(B)が動作の持続段階、(D)が動作の結果の持続段階を示している。このように、時間軸上では二つの持続は異なる時態範疇に属するように思われる。

(10)



木村(1983)は、アスペクトの“着”には、「状態の持続」を表す“着”と「動作の進行」を表す“着”があり、これらは異なる文法範疇に属するという主張を行っている。木村の述べている「状態の持続」、「動作の進行」と、本論の「動作の結果の持続」と「動作の持続」は、時間軸上の事態の局面としては同じ部分を示している。木村は状態の持続の“着”は時態接尾辞ではなく、結果補語に近い性質を持つと述べ、状態の持続を表す“着”を“着d”、動作の進行を表す“着”を“着p”と表示し、次のような例を挙げている。

(11) a. 外头正在下着 p 雨

b. 外头推着 d 柴火 (木村 1983)

木村は、これらが文法上異なる意味として機能することは、否定詞“没有”との共起関係からも見て取れると指摘している。

(12) a. *外头没下着 p 雨

b. 外头没推着 d 柴火 (木村 1983)

1.2 問題解決のための理論と分析方法

時態助詞“着”は動作の持続(あるいは動作の進行)と動作の結果の持続(あるいは状態の持続)を表す。では、“着”は二つの異なる時態範疇に

属するのか。本論では、これらは共に「持続」を表す時態範疇と考える。(10)の図中で、二つの持続が動作の異なる段階を捉えているのは、文の中心的な意味を表す動詞の特徴が異なっているためである。動作の結果の持続が現れる文は構造的には存在文で、“着”を伴う動詞は、その動作の結果、動作主あるいは動作の対象物がある場所に定着することを表している。本論では、このような動詞を「定位動詞」と呼ぶことにする。一方、動作の持続を表す文を構成する動詞は、動作の終息点を持たない持続動詞である。

このように、“着”が表す二つの持続は、文を構成する動詞の時間特徴によって制限を受けている。動詞の持つ時間特徴は、語彙的アスペクト¹⁾と呼ばれることがある。動詞は動詞自身の持つ時間特徴によりいくつかのグループに分類でき、これらの動詞は異なる事態状況を表す文に現れる。文が表す事態状況は「状況タイプ (situation type)」と呼ばれる。動詞の状況タイプの研究としてよく知られているものに、Vendler (1967) の分類がある。Vendler は動詞が構成する状況タイプを、状態 (state)、活動 (activity)、完結 (accomplishment)、達成 (achievement) に分類した。動詞が持つこのような語彙的アスペクトの体系を陈平 (1988) は、「時相 (phase)」構造と呼び、現代中国語の時間体系は「時相」、「時態」、「時制」の三つの構造から構成されると述べた。ただし、陈平のいう時相構造は、動詞中心ではあるが、他の要素も参与する。どのような要素が時相を構成するのかについては、次の節で詳述する。また、龚千炎 (1995) は陈平の理論を発展させ、欧米言語の時間体系が「文法範疇」であるのに対し、現代中国語の時間体系は「語彙・文法範疇」であるという見解を示した。龚千炎は、「時相」、「時態」、「時制」の関係について、中国語の時間体系は時相から時態、時制へと生成され、時相構造が時態と時制に選択可能性を与えていると述べている。本論では、陈平と龚千炎の時相理論を応用して、時態助詞“着”の表す二つの持続について分析し、これらが時間軸上で異なる局面を示しているのは「時相」構造の違いによるものであり、時態範疇としては「持続」を表すことを述べる。

2 「状況タイプ」

現代中国語の「状況タイプ」に着目した研究としては、馬慶株（1981）、鄧守信（1986）、陳平（1988）、龔千炎（1995）の論述がある。しかし、これらの研究は、状況タイプを決定する成分として何を含むのか、またどのような時間特徴を基準にするのかという点でそれぞれ異なっている。以下では、各研究者の捉え方をまとめる。

2.1 馬慶株(1981)

馬慶株は状況タイプを動詞の持つ[±持続]、[±完成]、[±状態]の三つの意味特徴に基づき、次のように分類している。

	持続	完成	状態
Va 死、知道、看見…	－	＋	
Vb1 等、坐…	＋	－	
Vb21 看…	＋	＋	－
Vb22 挂…	＋	＋	＋

2.2 鄧守信（1986）

鄧守信は、文全体の意味特徴から状況タイプを「活動」、「完結」、「達成」、「状態」の四つのタイプに分類している。鄧守信は、時態は動詞そのものではなく、状況タイプの時間構造から制限を受けると述べている。たとえば、“*他教书了”が文法的に不適格であるのに対し、“他教过书”が適格であるのは、動詞の制限によるものではなく、“他教书”が持続する時点を表す「活動」状況に属するからだ分析している。また、“他买了一本词典”のような数量詞が目的語を修飾している文が必ず完了の時態“了”を伴うという現象も、状況タイプの角度から合理的に説明できると述べている。つまり、状況タイプから見れば、この文は「活動」状況文でなく「完結」状

況文であり、「完結」状況の時間構造は活動が完結する終点を表すからである。

2.3 陈平 (1988)

陈平は時制、時態を表す成分を除外した成分の語彙的意味が時相構造を決定するとしている。また、どの時態の出現が可能か、どの時制の出現が可能かは、時相構造が決定すると述べている。陈平によれば、時相構造を決定する成分のうち、動詞が最も重要な要素として機能し状況タイプの可能性を提供し、目的語及び補語、あるいは主語、その他の成分が具体的な選択を行い時相構造が確定する。陈平は、このような語彙的意味が決定する時相を、[±静態]、[±持続]、[±完成]の意味特徴から次のような五つの状況タイプに分類した。

	静態	持続	完成
I. 状態	+		
II. 活動	-	+	-
III. 完結	-	+	+
IV. 複変	-	-	+
V. 単変	-	-	-

2.4 龚千炎 (1995)

龚千炎は、[±静態]、[±動態]、[±持続]、[±完成]の四つの特徴に基づき、次のように分類している。

	静態	動態	持続	完成
状態状況文	+	-		
活動状況文	-	+	+	-
完結状況文	-	+	+	+
実現状況文	-	+	-	+

3. 状況タイプと“着”の選択制限

龚千炎（1995）は、時相構造の特徴により状況タイプを四つに分類し、各状況タイプ文について考察した。本節では、龚千炎が述べている各状況タイプにおける時態形式の選択について、“着”を中心に確認する。

3.1 状態状況

龚千炎によれば、このタイプの状況は静止して動かない状態を表す。龚千炎は、状態状況を表す文を構成する動詞を、（一）関係動詞、（二）心態動詞、（三）状態動詞に分けている。関係動詞とは、判断、存在、呼称、同等、比較、属性などの関係を表す動詞で、たとえば好像、仿佛、等于、性、是、属于、有、具有、在などがある。心態動詞は感情や認知など心理状態を表す動詞で、喜欢、高兴、爱、满意、相信、怀念、羡慕、愁、讨厌、担心、希望、觉得、认识などがある。状態動詞は、有性物がどのような姿態で存在しているか、事物がどのような状態で存在しているかを表し、坐、站、躺、蹲、挂、摆、堆、装、开、闭などの動詞が含まれる。

龚千炎によれば、関係動詞は最も強い静態を持つため“了、着、过”を伴えず、“在 / 正在”や時量句を用いて持続を表すことができない。心態動詞は、過去の時間と関係を持つため“过”と共起でき、多くが“了”を伴うことができるが、“着”や“在 / 正在”を用いて持続を表すことができない。状態動詞は、動作後の有生物が持つ姿態や無生物が存在する位置を表

すため、“着”を伴い動作の結果の持続（動作の結果の静態の維持）を表すことができるが、動詞の前に“在 / 正在”を伴うことができない。状態動詞が“在 / 正在”を伴うと、動作行為動詞になる。

(13) 会议室里摆着沙发。(龚千炎 1995:17)

(会議室には、ソファが置かれている。)

(14) 会议室里在摆沙发。(龚千炎 1995:17)

(会議室にソファを並べているところだ。)

3.2 活動状況

活動状況は、動態的状况を表し、内部に終息点を持たないため理論上は無限に続くことができる。活動状況に用いられる動詞は持続性を持つ動詞で、動作行為動詞と心理活動動詞が含まれる。動作行為動詞には、たとえば说、读、看、喊、学、画、买、唱、打、擦、吃、来、去；跑、跳、走、哭、笑などの動詞がある。心理活動動詞には、想、猜、考虑、思考、琢磨、回想などがある。この他、坐、挂などの動詞も動作動詞として活動状況を構成できる。動作行為動詞や心理活動動詞は、“在/正在”、“着”と共に起し、活動状況文を構成する。また、これらの動詞は時量句を伴い動作行為や心理活動の持続時間を表すことができ、一部の動詞は動作後の経過時間を表すこともできる。

(15) 这本小说我看了三天。

(この小説は三日間読んだ。)

(16) 这本小说才看了三天，我就记不得了。

(この小説は読んで三日しかたっていないのに、もう覚えていない。)

3.3 完結状況

完結状況は、動態性を持ち、動作行為の持続を表すことができるが、自然終息点を持つため、動作が次第に終息に向かうことを表す。完結状況を構成する述語には、「動作+結果」構造からなる完結動詞が用いられる場合と動作行為動詞、心理活動動詞などの持続性を持つ動詞が用いられる場合

がある。龚千炎は、完結動詞として、变成、成为、化为、改为、扮做、跑来、爬上、送回、揭开、扩大、缩小、拉长、办好、修好、放松、抓紧、堵死、打通、改良、改正などを挙げている。持続性動詞が用いられる場合は、終息の意味は他の成分によって表される。

(17) 爷爷最近写了两篇论文。(龚千炎 1995:20)

(おじいさんは最近二編の論文を書いた。)

この例文では、持続動詞“写”が表す動作の終息は“两篇论文”によって表されている。このように持続性動詞と終息成分が組み合わさる場合は、有限ではあるが持続の段階を持つので、“着”によって持続を表すことができる。一方、完結動詞は動作が終息に向かい進展することが前提とされているので、進行を表す“在/正在”と共起できるが、一般に“着”を伴い持続状態を表すことができない。

(18) a. 冰正在化为水。(龚千炎 2012:20)

(氷がちょうど溶けているところだ。)

b. *冰正在化着为水。(龚千炎 2012:20)

3.4 達成状況

達成状況は瞬間的に発生する事態を表し、瞬間性を特徴とする。達成状況に現れる動作行為は、内部の時間構造から見ると開始点と終息点が重なっているといえる。そのため、これらの動作行為の持続の過程を捉えることはできないが、瞬間的に実現する状態の変化を捉えることができる。達成状況文では、述語である単独の動詞か結果補語を伴う構造が瞬間性を表す場合と、他の成分によって瞬間性が表される場合がある。前者に用いられる瞬間動詞としては、死、倒、醒、炸、断、到、掉；打破、跌倒、吃完、拿到、写错などがある。龚千炎はこれらの瞬間動詞は非持続性の特徴を持つので、“在/正在”や“着”と共起できないと述べている。

(19) a. 房间里的电灯灭了。(龚千炎 1995:26)

(部屋の電灯が消えた。)

b. *房间里的电灯在灭。(龚千炎 1995:27)

c. *房间里的电灯灭着。(龚千炎 1995:27)

4 論理構造の記述と分析

前節では、動詞を中心とした時相構造が持つ特徴が、持続を表す時態助詞“着”の選択に関わっていることを確認した。本節では、「動作の結果の持続」を表す“着”と「動作の持続」を表す“着”を含む文について、命題論理 (propositional logic)²⁾と述語論理 (predicate logic)³⁾を用いて論理構造を記述し、時相構造が時態範疇の選択に一定の制限を与えていることを論証する。

4.1 「状態状況」と“着” — 動作の結果の持続

状態状況を表す文に現れる動詞のうち、時態助詞“着”と共起できるのは定位動詞(龚千炎は状態動詞と呼んでいる)だけである。定位動詞は動作の結果、動作主や事物がある位置に定着し、それにより静態の状態となり持続するため持続の局面を捉える“着”と結合することができる。このことをより客観的に明示するために、文の持つ論理構造を記述することにする。まず、次の文を見てみよう。

(20) 菜在桌子上摆着。(龚千炎 1995:14)

(料理がテーブルの上に並べられている。)

この文に含まれる意味を分解して捉えると、「誰かが料理を並べる」、「料理が机の上にある」、「誰かが料理を並べ、かつ料理が机の上にあることが持続している」、「料理が、机の上において、～という状態にある」という命題が抽出できる。第一の命題は動作を表し、述語論理を用いて表記すると、2項関数「摆’(ϕ , 菜)」となる。「 ϕ 」(ファイ)は文中に現れていないが動作“摆”(並べる)の動作主を表す。第二の命題は動作の結果を表し、「在’(菜, 桌子上)」と表記できる。これら二つの命題はこの文において同時に成立するので命題論理の連言「&」で連結され、複合命題を構成し「摆’(ϕ , 菜) & 在’(菜, 桌子上)」となる。さらに、第三の命題は動作の結果が“着”によって持続していることを表すので、これは「有’(~, 着)」

と表記できる。この命題も同時に成立するので前述の複合命題の式と連鎖し、「摆'(φ, 菜)&在'(菜, 桌子上) &有' {摆'(φ, 菜) &在'(菜, 桌子上), 着}」となる。この複合命題が、この文の命題の意味を表す。第四の命題は、前置詞“在”が構成する命題で、「～ガ、～ニオイテ、～トイウ状態ニアル」という文型意味を表す。これを3項関数として捉えると、「在'(菜, 桌子上, ～)」と表記できる。この式の第3項に命題の意味を表す複合命題を代入すると、全体の式は次のようになる。

$$(20') \quad \text{並べ}^{\alpha} \sim \text{ガ}^{\beta} \sim \text{ヲ} \text{アル} \sim \text{ガ}^{\gamma 1} \quad \sim \text{ニ} \quad \text{スル} \quad \sim \text{ガ}^{\gamma 2} \quad \sim \text{ガ}^{\gamma 3}$$

在'[菜, 桌子上, 摆'(φ, 菜)&在'(菜, 桌子上)&有' {摆'(φ, 菜)&在'(菜, 桌子上)
アル} ~ガ ~ニオイ

[持続]

, 着}

～トイウ状態ニ

この論理式は、「料理が、机において、誰かが料理を並べ、料理が机の上にある、誰かが料理を並べかつ料理が机にあることが持続しているという状態にある」という意味を表す。この式の構造は、「～ガ、～ニ、～トイウ状態ニアル」という意味を表す3項関数「在'(α, β, γ)」が文全体の意味(文型意味)を表し、第3項(γ)に文の持つ命題の意味が現れている。γ項の第1式(γ1)は“摆”(並べる)という動作を表し、「φ」(誰か)が動作主、“菜”(料理)が「対象」であるという「意味役割」が表示されている。第2式(γ2)では、“菜”が動作の結果として“桌子上”(机の上)にあることが示されているが、これにより動作内部に「終息点」を持つのでここで「時相」が充足する。第3式(γ3)では、時態助詞“着”によって、動作の結果事物の存在が[持続]することが示されている。このように“着”は、表層上は動詞“摆”に接辞するが、意味上は“摆”という動作の結果の持続を表している。

次の例についても、論理式で表記してみよう。

(21) 他就那么一动不动地在床上躺着。(龚千炎 1995:14)

(彼はあのように微動だにせずベッドに横たわっている。)

この文の中心的な部分は“他一动不动地在床上躺着。”で、「彼は微動だにせずベッドに横たわっている。」という意味内容を持つ。この文が表す状況タイプは、「人が横たわっている」という静的な「状態」である。この文が表す意味内容を分解して捉えると、「彼が横たわる」、「彼がベッドの上にいる」、「彼がベッドの上において微動だにしない」、「彼がベッドの上において微動だにしないことが[持続]している」、「彼が、ベッドにおいて、～という状態にある」という命題が取り出せる。これらの要素命題を述語論理で表記すると、第一命題は「躺'(他)」、第二命題は「在'(他, 床上)」、第三命題は「有'{在'(他, 床上), 一动不动}」、第四命題は「有'[有'{在'(他, 床上), 一动不动}, 着]」となる。これらは同時に成立するので、命題論理の連言「&」で結ばれ、「躺'(他)&在'(他, 床上) &有'{在'(他, 床上), 一动不动}&有'[有'{在'(他, 床上), 一动不动}, 着]」という複合命題を構成する。これが、この文の持つ命題的意味を表す。第五命題は、前置詞“在”が構成する意味で、「在'(他, 床上, ~)」と表記できる。この3項関数の第3項に命題的意味を表す複合命題を代入すると文全体を表す式が得られる。

(21*) 横^αヲ^β〜ガ^{γ1} オ^{γ2-1}〜ニ^{γ2-2} マ^{γ3} ヲ^{γ3}〜トイウ[状態]ヲ
 在'[他, 床上, 躺'(他)&在'(他, 床上)&有'{在'(他, 床上), 一动不动}&
 アル^α〜ガ^β〜ニオイ
 α β γ1 γ2-1 γ2-2
 スル^α〜ガ^β [持続]
 有'[有'{在'(他, 床上), 一动不动}, 着]]
 〜トイウ状態ニ
 γ3

この式は、前置詞“在”が「〜ガ、ニオイテ、〜トイウ状態ニアル」という文型意味を表す3項関数「在'(α, β, γ)」として機能している。αには「話題」、βには「副話題」が生起し、文の命題的意味はγに生起している。γ1は、“他”(彼)が“躺”(横たわる)という動作の動作主であると

いう「意味役割」を表す。 γ 2-1は、動作の結果“他”が“床上”に存在することを表す。“躺”は内部に[終息点]を持たない持続動詞であるが、結果を持つことで終息点を持つ。 γ 2-2では、彼がベッドにいることが“一动不动”（微動だにしない）というという[様態]を持つことを表す。 γ 2-1で動作が[終息点]を持つことで動作量が確定し、さらに動作が[様態]を持つことで限定されるので、ここで「時相」が充足する。 γ 3では、時態助詞の“着”によって動作の結果が[持続]していることが表示されている。つまり、“着”は「動作の結果の持続」を表す。

このように、「状態状況」タイプに属す文のうち「在+位置」を含む文は、持続動詞（活動動詞）が表す動作の結果、人や物がある場所に付着して存在することを表すので、動作が[終息点]を持つことが明確である。そのため、時態助詞“着”は動作の結果、人の姿勢や事物の存在という静態的状态が持続することを表す。同様の状況タイプの文で「在+位置」を含まない文では、場所を表す成分が表層上には現れていないが、意味的には同様の構造を持つ。たとえば、次の文を見てみよう。

(22) 他们都穿着新衣服。(刘月华・他 2001:393)

(彼らは皆新しい服を着ている。)

式が複雑になるので副詞“都”は省略して分析する。この文において“穿”という動詞は、「着る」ではなく、「着ている」という意味を表している。つまり、動詞分類的には「動作動詞」ではなく「状態動詞」として機能している。「着ている」という意味は、「着るという動作の結果、着た物が身体に付着し静止状態にある」と捉えることができる。これを、述語論理で表すと、「穿’(他们, 新衣服)&在’(新衣服, 他们)」と表記できる。この複合命題の第一式は「彼らが新しい服を着る」という意味を表し、第二式はその結果「新しい服が彼らの(身体)にある(=付着する)」という意味を表す。これに、時態助詞“着”の「持続」の意味が加わり、文全体の式は次のようになる。

(22') 穿'(他们, 新衣服)&在'(新衣服, 他们) &有'{穿'(他们, 新衣服)&在'(新
 着 ~が ~ヲ アリ ~が ~ニ スル ~が
 γ1 γ2 γ3
 衣服, 他们), 着}
 [持続]

この式のγ1には、“他们”(彼ら)が“穿”(着る)という「動作主」で、“新衣服”(新しい服)が「対象」であるという「意味役割」が生起している。γ2は、動作の結果、“新衣服”が「彼ら(の身体)」に付着することを示し、動作が終息点を持つのでここで「時相」が充足する。γ3では、時態助詞“着”によって「新しい服が彼ら(の身体)に付着している」状態が[持続]していることが表示されている。つまり、“着”は「動作の結果の持続」を表す。

4.2 「活動状況」と“着” — 動作の持続

活動状況を構成する時相構造は、内在的な終息点を持たず、理論的には無限に持続することを特徴とする。そのため、この持続の意味特徴が動作行為の持続を表す時態助詞“着”の選択を許容していると予測できる。しかし、活動状況文を構成する持続性動詞は、実際には時態範疇の“在/正在”、“了”、“着”、“过”のすべてについて選択可能性を持つ。これは、動的な持続の段階は進行や持続中の動作行為だけでなく、完了している動作行為中にも、あるいは過去の経験となっている動作行為中にも含まれるからである。ただし、持続性動詞が終息点を持つ場合、それらが表す状況は、活動状況ではなく完結状況となる。以下では“着”が共起する活動状況文の例を取り上げて、その論理構造を記述し、活動状況における時相と時態の関係を考察することにする。

活動状況において“着”が用いられている文としては、次のような例がある。

(23) 李兆昌用手中擦着嘴。(龚千炎 1995:17)

(李兆昌は、ハンカチで口を拭っている。)

この文の動詞“擦”（拭う）は内部に終息点を持たない持続動詞で、“着”は“擦嘴”（口を拭う）という動作活動が続いていることを表している。この文は、「李兆昌がハンカチを用いる」、「ハンカチで（が）口を拭う」、「ハンカチで（が）口を拭うという動作が続いている」という要素命題を含む。第一命題を述語論理で表すと、「用’（李兆昌, 手巾）」となる。第二命題は、“手巾”（ハンカチ）が動作“擦”（拭う）の直接の働き手（道具）なので、「擦’（手巾, 嘴）」と表記できる。第三命題は、“擦”という動作の持続を表す命題で、「有’{擦’（手巾, 嘴）, 着}」と表記できる。これらの式は同時に成立するので、命題論理の連言「&」で結ばれ、全文の式は次のような複合命題となる。

(23) 用’（李兆昌, 手巾）&擦’（手巾, 嘴）&有’{擦’（手巾, 嘴）, 着}
 用イ ～が ～ヲ 拭イ ～が～ヲ スル ～が [持続]
 $\gamma 1-1$ $\gamma 1-2$ ($\gamma 2$) $\gamma 3$

この式は、(23)の文の命題の意味を表している。 $\gamma 1-1$ では、“李兆昌”が動作主、“手巾”が道具であるという「意味役割」が現れている。 $\gamma 1-2$ も同様に、“手巾”が道具で、“嘴”が動作の対象であるという「意味役割」を表示している。 $\gamma 2$ は一般的に「量化」（時相）を表すが、この式では $\gamma 2$ は直接現れていない。この文は連動文で、二つの動作の関係は前方動詞“用～”（～を用いる）が後方動詞“擦～”（～を拭う）が表す動作の手段である。つまり、「口を拭う」という動作は、「ハンカチを用いる」という動作によって下位範疇化されていると捉えられるので、集合論的には、「ハンカチで口を拭う」は「口を拭う」の部分集合となる。そのため、 $\gamma 1-2$ は「量化」を含み、ここで「時相」が充足する。 $\gamma 3$ では、“着”によって時態が表示される。ここでは、この“着”が「ハンカチで（が）口を拭う」という動作の持続を表すことが明示されている。次の例も見てみよう。

(24) 我远远地望着后沟里的那些土窑洞(龚千炎 1995:18)

(私は遠くから裏の谷間のあれらの洞穴を眺めている。)

“望”（眺める）は内部に終息点を持たない持続動詞で、時態助詞“着”によって“望”という動作活動が持続していることを表す。この文は、「私

るので、命題論理の連言「&」で結ばれ、全文の式は次のような複合命題で表示できる。

$$\begin{array}{c}
 (25') \text{ 思考' (我, 各种问题) \& 有' (思考' (我, 各种问题), 不断地) \& 有' [有' (思考' } \\
 \text{思考スル} \sim \text{が} \quad \sim \text{ヲ} \quad \text{モツ} \quad \sim \text{が} \quad \text{[様態]} \quad \text{スル} \\
 \gamma 1 \qquad \gamma 2 \\
 \text{(我, 各种问题), 不断地}, \text{ 着} \\
 \sim \text{が} \qquad \qquad \qquad \text{[持続]} \\
 \gamma 3
 \end{array}$$

この式の $\gamma 1$ には、“我”（私）が“思考”（思考する）という心理活動の経験者で、“問題”が心理活動の対象という意味役割を持つことが現れている。 $\gamma 2$ では、心理活動が「絶え間ない」という[様態]を持つことが表示されている。「思考する」ことは「絶え間ない」という[様態]によって下位範疇化されるので、集合論的には「絶え間なく思考する」ことは「思考する」ことの部分集合であると言える。そのため、全体に対して部分が確定するので「量化」を表し、「時相」はここで充足する。 $\gamma 3$ は、時態助詞“着”によって心理活動が持続することを表す。

このように活動状況において共起する“着”は、動作行為や心理活動の持続を表す。

4.3 「完結状況」と“着” — 動作の持続

「完結状況」は動態性を持ち、動作行為が持続することを表すが、内部に終息点を持ち、事態が必ず終息することを含意する。このように「完結状況」は終息性を持つので、完了を表す“了”と共起することが多い。しかし、「完結状況」は一定の動作の持続段階を持つので、“在/正在”や“着”とも共起できる。“着”を伴う完結状況文には、たとえば次のような例がある。

(26) 小红正在读着两首唐诗。(龚千炎 1995:80)

(紅さんは、ちょうどいま二首の唐詩を読んでいるところだ。)

この文の論理構造は、以下のように記述できる。“正在”の意味は、式が

複雑になるので“正”と“在”に分けず「～ガ～ニチョウドアル」という論理として捉える。

- (26*) 读'(小红, 唐诗)&有'(唐诗, 两首)&有'(读'(小红, 唐诗)&有'(唐诗, 两首), 着} &正在'[有'(读'(小红, 唐诗)&有'(唐诗, 两首), 着}, 那儿] [持続] チョウトアル ～ガ ～ニ
- $\gamma 1$ $\gamma 2$ $\gamma 3-1$
 $\gamma 3-2$

この式の $\gamma 1$ には、“小红”(紅さん)が“读”(読む)という動作の動作主で、“唐诗”(唐詩)が動作の対象であるという「意味役割」が現れている。 $\gamma 2$ は“唐诗”が二首あることを表示し、ここで動作量が確定するので、動作が終息点を持ち時相が充足する。 $\gamma 3$ には時態が現れる。 $\gamma 3-1$ は、“着”によって「読む」という動作が持続することを表す。 $\gamma 3-2$ では、“正在”によって、「読む」という動作が[持続]している状況がそこに存在していることが表示され、これにより[進行]の意が現れている。

4.4 「達成状況」— 非持続

「達成状況」は瞬間的に発生する事態を表し、ある状態が瞬間的に変化して別の状態になる局面を捉えることを特徴する。「達成状況」を構成する瞬間動詞は、内部の開始点と終息点が重なり合っているため、この状況タイプは持続の過程を捉えることができない。このような瞬間性と変化の実現という特徴から、「達成状況」は[完了]を表す時態助詞“了”とは共起できるが、[進行]や[持続]を表す“在/正在”、“着”とは共起できない。

- (27) 大爷的那头黄牛死了。(龚千炎 1995:25)
 (おじいさんのあの黄牛は死んだ。)
- (28) *大爷的那头黄牛在死。(龚千炎 1995:27)
 (*おじいさんのあの黄牛は死んでいるところだ。)
- (29) *大爷的那头黄牛死着。(龚千炎 1995:27)
 (*おじいさんのあの黄牛は死に続けている。)

5 時相と時態の関係

龚千炎（1995）の論述に基づき、四つの「状況タイプ」において、時態範疇“着”と“在/正在”が選択可能かどうかの状況をまとめると、次のようになる。龚千炎は、坐、挂など動作後に動作主の姿態や事物の存在が静態的に持続する動詞を状態動詞と呼んでいるが、本論ではこれらの動詞を「定位動詞」と呼ぶ。

（表1）

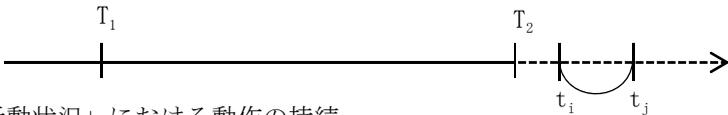
状況タイプ	構成動詞（+他成分）	“着”	“在/正在”
状態状況	関係動詞（是、在など）	×	×
	心態動詞（相信、懂など）	×	×
	定位動詞（坐、挂など）	○（結果の持続）	×
活動状況	動作行為動詞	○（動作の持続）	○
	心理活動動詞	○（動作の持続）	○
	定位動詞（坐、挂など）	×	○
完結状況	完結動詞（变成、修好など）	×	○
	動作行為動詞+他成分	○（動作の持続）	○
	心理活動動詞+他成分	○（動作の持続）	○
	定位動詞+他成分	×	○
達成状況	瞬間動詞	×	×
	状態動詞+他成分	×	×

上記の表からわかるように、坐、挂などの定位動詞は、「状態状況」では“着”を伴えるが、活動状況と完結状況においては“着”を伴うことができない。これは、次のような理由による。定位動詞は動作の開始段階とその結果である静態的持続（いわゆる状態）の段階を含むが、“着”は定位動詞の結果段階にしか生起できない。そのため、「定位動詞+“着”」の形式が表す状況は必然的に「状態状況」になり、「活動状況」や「完結状況」ではなくなるからである。

このように、“坐”，“挂”などの定位動詞が用いられる「状態状況」では、“着”は動作の結果を表す。一方、「活動状況」や「完結状況」に生起する“着”は、動作の持続を表す。活動状況は理論的には無限の持続を前提とし、完結状況は有限の持続段階を含む。そのため、これらの状況タイプは、無限にせよ、有限にせよ、一定の持続段階を含んでいるので動作の持続の局面を切り取ることができる。このような持続段階を観察する場合、無限の持続全体を観察の対象とするのではなく、持続中のある時点を対象とする。「状態状況」における動作の結果の持続、「活動状況」における動作の持続、「完結状況」における動作の持続の観察時点を図で示すと以下のようになる。

(30) 持続の観察時段

a. 「状態状況」における動作の結果の持続



b. 「活動状況」における動作の持続



c. 「完結状況」における動作の持続



図中の T_1 は動作の開始点、 T_2 は動作の終息点である。(a)の「状態状況」、では、“坐”、“挂”など定位動詞は動作が終息すると同時に静的な状態に変化する。この状況における“着”はこの静的な状態を表している。(b)の「活動状況」の時間軸上には動作の開始点 T_1 だけがあり終息点はなく、無限の持続を表しているが、“着”によって観察される持続の局面は、時段 (t_i, t_j)

である。(c)の「完結状況」でも持続が観察可能な場合には、時段 (t_i, t_j) が観察局面となる。たとえば、“小红正在读着两首唐诗。”では、“读”は持続動詞だが“两首唐诗”によって動作量が確定するため、この事態は終結点を持つ。しかし、“读”という動作は終結点に至るまで持続しているので持続の局面を捉えることができる。

加藤 (2002b) は、時相と時態の関係について、時態は動作行為と直接関わるのではなく、「充足した時相」⁴⁾と関わりと述べている。加藤によれば、“台风刮到了大树。”(台風が大木を吹き倒した)という文は成立するが、“*台风刮了大树。”は成立しない。これは、前者では動補構造“刮到”(吹き倒す)の“到”が「自然の終結点」を表し時相が充足しているのに対し、後者は動詞“刮”(吹く)のみで時相が充足していないからであると述べている。このことは、持続動詞が[完了]の“了”を伴うためには、動作量を確定できる何らかの成分が終息点を与え時相が充足する必要があることを示している。また、加藤は、「動作行為そのものの持続」を表す“着”を時相に現れる“着 p”、「動作行為の結果の持続」を表す“着”を時態の“着 a”とし、時態の“着 a”は充足した時相と結びついていると述べている。本論では、両者は共に[持続]を表す時態の“着”であることを論じた。筆者は、時態が時相の充足と結びつくという加藤の考えを基本的に支持するが、「動作の結果の持続」を表す“着”だけでなく「動作の持続」を表す“着”が生起する状況においても、時相は充足していると考える。時相構造は、動作(あるいは事態)に内在する開始点と終息点により構成されている。動詞だけを考えるならば、持続動詞は終息点を持たない。たとえば、“我远远地望着后沟的那些土窑洞”では、“望”(眺める)という動作は終息点を持たず、理論上無限に持続する。しかし、“远远地”(遠くから)という様態を持つことによって、“望”という動作は限定を受けている。様態により動作は下位範疇化されるので、これを量化と捉えることができ、時相は充足するといえる。

6 結びにかえて

本論では、現代中国語の時態助詞“着”が「動作の結果の持続」と「動作の持続」の二つの持続を表すことについて、“着”を含む文の論理構造を記述し、二つの持続の意味が「時相」特徴の違いから生じることを論証した。また、「時相」と「時態」の関係について、「動作の結果の持続」を表す“着”が生起する文だけでなく、「動作の持続」を表す“着”が生起する文でも時相が充足しているという考えを述べた。「時相」は、動詞の語彙的な意味特徴に依存し、他の成分とも関係するため、時間範疇としての位置づけは確立されていないが、本論では「時相」が「時態」の選択可能性を提供していること的一端を時態助詞“着”との関係を通して考察した。他の時態範疇を含めたより詳細な分析については、今後の課題としたい。

注

- 1) 影山（1996:41）参照。
- 2) 命題論理（Propositional Logic）は、形式意味論で用いられる基本的な方法論の一つで、命題（文）と命題（文）の関係を記述する。文の間の論理関係は、&（連言）、∨（宣言）、→（含意）、¬（否定）などの結合子によって決定される。
- 3) 述語論理（Predicate Logic）は、命題の内容（文の内部構造）を意味論的に分析する論理言語である。基本的には命題を、述語（predicate）と述語の要求する項（argument）の組み合わせとして記述する。項の数により、1項述語、2項述語、3項述語のように呼ばれる。
- 4) 加藤（2002b）は、「時相」には充足／未充足の区別があり、動作行為は「自然の終結点」を持つことで「ひとまとまり」となり時相が充足すると述べている。加藤は、“了”だけでなく“着”や“过”などの時態も同様の原理で「充足した時相」と結びつくとしている。

参考文献

(中国語)

- 陈平 1988. 〈论现代汉语时间系统的三元结构〉，《中国语文》第6期。
- 戴耀晶 1991. 〈现代汉语表示持续的“着”的语义分析〉，《语言教学与研究》第2期。
- 邓守信 1985. 〈汉语动词的时间结构〉，《语言教学与研究》第4期。
- 范晓 2009. 《汉语句子的多角度研究》。北京：商务印书馆。
- 方立 2000. 《逻辑语义学》。北京：北京语言大学出版社。
- 龚千炎 1995. 《汉语的时相时制时态》。北京：商务印书馆。
- 郭锐 1993. 〈汉语动词的过程结构〉，《中国语文》第6期。
- 李临定 2011. 《现代汉语句型（增订本）》，北京：商务印书馆。
- 李讷・石毓智 1997. 〈论汉语体标记诞生的机制〉，《中国语文》第2期。
- 刘月华・他 2001. 《实用现代汉语语法（增订本）》，北京：商务印书馆。
- 陆俭明 1999. 〈“着(zhe)”字补议〉，《中国语文》第5期。
- 吕叔湘主编 1999. 《现代汉语八百词（增订本）》，北京：商务印书馆。
- 马庆株 1981. 〈时量宾语和动词的类〉，《中国语文》第2期。
- 木村秀樹 1983. 〈关于补语性词语“着/zhe”和“了/le”〉，《语文研究》第2期。
- 朱德熙 1982. 《语法讲义》。北京：商务印书馆。

(日本語)

- 影山太郎 1996. 『動詞意味論一言語と認知の接点一』。東京：くろしお出版。
- 加藤広紀 2002a. 「現代中国語の「時制」の意味研究」、『人文研究』第146集。神奈川県大学人文学会。
- 加藤広紀 2002b. 「現代中国語の「時相」と「時態」の意味研究」、『言語と文化論集』第9号。神奈川県大学大学院外国語学研究科。
- 白井賢一郎 1985. 『形式意味論入門一言語・論理・認知の世界』。東京：産業図書。
- 杉本孝司 1998. 『意味論1—形式意味論—』。東京：くろしお出版。
- 布川雅英 2002. 「“把”構文」の中の“着”(zhe)について」、『言語と文

化論集』第9号。神奈川県大学大学院外国語学研究科。

フィルモア, チャールズ J. 著、田中春美・船城道雄訳 1975. 『格文法の原理
一言語の意味と構造』。東京：三省堂。

松村文芳 2011、2012. 講義ノート：神奈川県大学大学院中国語学研究Ⅲa/b。
(英語)

Chao, Yuen Ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley: University
of California Press.

Comrie, B 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Vendler, Z. 1967. *Linguistics and Philosophy*. Ithaca, New York:
Cornell University Press.